



受験 番号					
氏名					

二〇二五年度 二月一日 入学試験 国語問題

国語の注意 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。

字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項】

1 机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。

- ① 受験票（机の左上におきます）
- ② えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規は使用不可、ことわざ等記載のあるものは使用不可）
- ③ 消しゴム

2 次のものを持ってきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用できません。

- ① 腕時計・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
- ② 携帯電話・スマートフォン（電源を切ってください）
- ③ ウェアラブル端末（Apple Watch など）

※許可なく携帯電話・スマートフォンやウェアラブル端末を使用したり、携帯電話が鳴った場合、不正行為とみなす場合があります。

3 机の中には、何も入れないでください。

4 チャイムが鳴ったら、次のことを完了してから始めてください。

問題用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入してください。

解答用紙 ↓ 受験番号と氏名を記入し、席に準備されているシールを貼ってください。

5 問題についての質問は、いっさいできません。

6 気分が悪くなったら、すぐに申し出てください。

7 物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の文章は、杉^{すぎ}みき子『かくまきの歌』より「ある冬のかたすみで」の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

一

雪がふつていた。ふつてはどんどんつもつていた。

「ふるんだから、ふるんだから、だれがなんといつてもふるんだから、いやになるまでふるんだから、この世のおわりまでふるんだから、ふつて、ふつてふつてふつて、ふりつくすまでふるんだから——」。

あとからあとから落ちてくる雪のむれをじつと見つめていると、そんな声がきこえてくるような気がする。世のなかがしずまりかえつてしまい、⁽¹⁾近所となりがきゆうに遠くなり、どの家もどの家も、まるでとうふを水にしずめたように、雪のなかにすっぽりはまりこんでいた。

去年、静岡からひっこしてきたばかりのユウコは、あまり雪がふりすぎてもスキーはできないものだというのを、はじめて知った。それに、おとといから電気が消えつばなしなので、ラジオもきけない。しかたなく、昼でもうすぐらい茶の間で、こたつにあたりながら本を読んでいるうちに、うとうとねむつて、「女王さまのモミジ」のでてくる、へんな夢を見た。

「女王さまのモミジ」というのは、ユウコの家の庭にある、大きなモミジの木のことだ。もちろん、女王さまというのはユウコのつけた名まえで、ほんととは〈やしお〉というモミジだ。ものをいうカシの木だとか、こびとの住んでいるブナの木だとか、西洋のお話にはよくそんなのがあるから、このモミジが女王さまとよばれたってちつともおかしくない、というのがユウコのいいぶんだ。

じつさい、ユウコがそんなことを考えるのもむりはなかった。秋、紅葉するときは、いろんなふくざつな色あいをもった夕焼け空を、世界じゅうからそこへあつめてきたようだったし、五月の青葉のときは、この世にひとつしかないような、あざやかな黄みどりの炎^{ほのお}

が、そこにめらめらともえあがつていた。枝がすっかりはだかになってしまふ冬でさえ、灰色の空を背景に、ごつごつした骨ぐみをあらわにつたつていているそのすがたが、ほかのどの木よりも、いさましくどうどうとして見えるのだった。じつさい、この木のただ一つの欠点といったら、そのたつていいる庭があまりにも小さくて、ひんじやくだということかもしれない⁽²⁾。

さて、その「女王さまのモミジ」が、ユウコのいまの夢のなかでは、たいへんこまつていた。なぜこまつているのかわからないが、とにかく、なんとかしてたすけてやりたいと思うのに、ユウコはしゃべることができない。いくら口をうごかしても声がでないので、⁽³⁾気がつく⁽³⁾と、ユウコはいつのまにか、「女王さまのモミジ」とそっくりおなじような、大きなモミジの木になつていいるのだった。ユウコはおどろくよりもうれしくて、大きくせのびして胸をはつてみた。

そのとき、「ごめんください」という声がした。だれかがまたそれにこたえて、ぶつくさしゃべっている。その声がだんだん耳もとに近づいたので、ユウコは顔がつめたくなったような気がして目がさめた。

話し声は、夢ではなかった。お勝手口に、ほんとにだれかきいているらしい。

「いま主人がいけないもんですから……かえつてきて相談してから……」。

おかあさんの声が、そういつている。保険^{かんゆう}の勧誘^{かんゆう}の人か、それともこないだみたいに、ミシンの宣伝かしら。そう思いながらユウコは、いまの夢をなんとなくにくりかえっていた。

「でも、あのモミジはね……」。

そこへいきなり、そういう声が耳にはいつたので、ユウコはびくつとしてからだをおこした。耳をすましていると、どうやら、「女王さまのモミジ」についてなにかたのまれたのを、おかあさんがしきりにこたわっているらしい。ユウコは、胸がどきどきしてきた。そうつとでいてみようとこたわったとき、

「じゃあ、まあ、しょうがないわ。そんなにおっしゃるのなら。でも、ほんととはこまるんですけどねえ……」。

おかあさんのそういうのがきこえて、まもなく戸がしまった。ユウコは、窓のほうを見ながら、さっとたたみにひたいをおしつけた。入り口の、高い雪のだんだんをのぼっている人のすがたは、こうしないと見えないのだ。けれども、いっしゅん、アノラックらしい黄土色が目をかすめただけで、だれだかわからない。ユウコはこたつをとびだした。

「おかあさん、いまの、だれ。モミジがどうかしたの。」

おかあさんは、まだこまった顔でうなずいた。

「電気会社の人なんだけどね。うちのモミジの枝が電線にたおれかかっているから、切らせてくれるというの。」

「モミジを？ それで、おかあさん、いっていったの！」

「ああ、おとうさんがかえってきてから相談するっていったんだけどねえ。いそぐんだからどうしてもいま切らせてくれるというんだもの、しょうがないわ。」

ユウコは、みなまできかずに、長ぐつのなかへとびこんだ。

「どこへいくの、きゅうに。」

「やめてって、いってくるー！」

「あら、ユウコ、お待ち。だめよ、そんなこと。ユウコったら！」

ユウコはかまわず、屋根の重さで押しつぶされながらうら道へまわると、そこには、顔につきあたる雪をはらいのけ、ガボガボうずまりながらうら道へまわると、そこには、アノラックすがたの男がふたり、めいめい大きなのこぎりをかついで、なにか話しあっている。そして、「女王さまのモミジ」は、雪におしつぶされて、からだじゅうで悲鳴をあげているように見えた。高いこずえは、ひとつの大きな雪のかたまりになり、道のほうへすらりと伸びていた大枝は、その下に電線をかかえこんだまま、地面の雪とつながってしまっている。もつと雪がつもったら、人がへいきでこの上をふんで歩くかもしれない。ユウコはそう思って身ぶるいした。

タケシは、班長の小野さんが、なかなかその家からでてこないのを、じりじりして待っていた。きょうじゅうに、この町をぜんぶまわってしまわなければならないのに、まだここで六軒^{ろっけん}めなのだ。

「また、もんだな。」

タケシはつぶやいて、くちびるをかんだ。

ことは、雪のくるのがきゅうだったから、ふりだしたと思うと、たちまち電気がストップした。ことに、市の中心部をすこしはなれたところでは、なおしてもなおしても、そのすぐあとからぶつんと消えていく。それというのも、「森のみやこ」といわれるこの小さな市では、住宅地に木がひじょうにおおいからで、停電事故は、電線に雪がつもって切れるよりも、雪をかぶった木の枝が電線にたおれかかるためにおきるのが、はるかにおおい。この地方特有の重いベタ雪は、こうして、ひと晩で全市の電線をめちやめちやにしてしまうのだ。

そこで、きのうから、電気会社をはじめ、市のほとんどの工事店の電工が——タケシのような若い見習い工までみんな——かりあつめられて、臨時のきこりよろしく、のこぎりをかついでまわっている。けれども、そうですか、といってころよく切らせてくれる家は、ほとんど一軒もなかった。みんな、なにかしらもんくをつけて、いやな顔をする。

「うちの木は、五十年もまえからたってるんだ。それをいまさら……。」

（五十年間、じつとおんなじ高さでたってるわけじゃないでしょう。）

「おまえさんたち、電気屋だろ。木の心配するより電線のほうをはやくなおしたらどうだね。」

（ぼくだってそうしたいんです、ほんとうに。）

「ストだの値上げだの、サボるときはかつてなことといって、さあ雪がふったからって、人の木を切りにくるなんて、虫がよすぎる。」

（サボりたくてストをするんじゃない、値上げもぼくたちがやるんじゃない！）

けれども、このカッコのなかのことは、ほんとにしゃべるわけにはいかない。相手はお客さまなんだから。何度も頭をさげ、口がすっぱくなるほど話し、ときには押し売りみたいに追っぱられながら、根気よくたのみこんでまわるよりしかたがないのだ。昼はこうして歩きまわり、夜は夜でべつの仕事があるので、タケシはゆうべもろくにねむっていなかった。

さんざん待つて、自分の足あとが雪ですっかり見えなくなるころ、やっと小野さんがでてきてあごをしゃくつたので、タケシはほっとした。小野さんは、つぎの家へと、ひと足さきにまわっていく。そして、タケシが、たおれかかっている大枝のまわりの足場をふみかためながら、ふりむくと、すぐうしろに、赤いセーターを着て、帽子ぼうしもかぶらずつったままこつちを見つめている少女の、大きな目にでつくわしたのだ。

三

タケシは、ちよつとわらつてみせた。が、少女はにこりもしない。タケシは、自分のからだのまわりを見まわした。花でもふみつけたか、窓ガラスにきずをつけたか、なにかそんなことでとがめられているような気がしたのだ。それから、**ぶっきまほつ**にいった。

「なんだい。」

ユウコはだまつている。なんといつていいか、わからなかったのだ。タケシがまたむこうをむくと、いそいでいった。

「その木、切らないで。」

「この木？ あんたちの木か。だけど、あんたのうちの人が、切つていいつていったんだよ。」

「切つていいなんていわないわ。おとうさんがかえつてきて相談してからつて、いったんだわ。」

タケシは、ちよつととまどつた。小野さんは、めんどくさくなって、いいかげんことをいつてきたんだろうか。

「ほんとよ、ほんと。」

すこしあわててくりかえすユウコの顔を見て、タケシは、ははんうそだな、と思い、子どもだな、とおかしくなった。

「わかつたわかつた。ほら、雪がかかるぜ、うちへはいつてろよ。」

ユウコはまっかになった。見えすいたうそをついた自分と、その自分を子どもあつかひした相手と、両方にはらがたつたのだ。去年、中学をでたばかりの小がらなタケシは、六年生のユウコから見ても、おとなとは見えない。なにさ、わたしといくつもちがわなく世に——そう思うと、なおさらはらがたつた。

「ユウコ、ユウコ。」

家のなかでは、おかあさんがしきりによんでいる。ユウコは、**じだんだみ**たくなつた。

「子どもあつかひするの、よしてよ。その木がどんなにすばらしい木だか、あんたなんか知らないんですよ。だいいち、わるいこともしない木をやたらに切るなんて、かわいそうじゃないの。それに、かつてすぎるわ。この枝を切られたら、この木、枯かれちゃうかもしれないじゃない。木や花をだいにしよう、いたわつてやろうつて、あんた、学校でならわなかつたの。」

タケシの顔を見て、ユウコはちよつとだまつたが、またすすみで、モミジの枝をだくように手をのばした。

「切らせないから。これ、わたしのだいじな木なんだもん。」

タケシは、まるで、きたないものを見るような顔になった。

「あんた、どつからきたんだ。」

「どこだつていいんじゃないの。ひとのだいじな木を、むやみに切るような人と関係ないわ。⁴⁾この町の人つて、みんな、木をだいにすること知らないのかしら。」

タケシは、**ここ**でばくはつした。たれさがつた大枝をぎゅつとつかんで、どなつた。

「あまつたれるな！」

ユウコはびくつと身をかたくしたが、まだ木からはなれない。タケシは、のこぎりをもちなおすと、ぶつけるようないきおいでしゃべりだした。

「あまつたれるな。木や花をだいにしましようなんていうのは、雪のふらないとこの話なんだ。この雪んなかじや、おたがい、自分たちの暮らしをまもっていくだけでせいっぱいなんじゃないか。そんなにだいいな木なら、どうしてはやくから囲いして、たおれないようにしとかないんだ。この木をこのままにしたら、いくら電線をなおしても、またその上へたおれかかって、いつまでたっても電気がつかないのがわからないのか。ーペンや二へんはらったからって、それでおさまるような、そんななまやさしい雪なら、だれもこんな苦労しやしない。おれだって、木や花はすきだよ。だれがすきこのんで、毎日もんくいわれながら、ひとのうちの木を切りにくるもんか。おれだって、おれのうちだつて、はやく雪おろししなきゃ、つぶれそうになってるんだ。だけど電気がつかなきゃ、やすんで雪おろしもできないじゃないか。そうさ、たおれそうな木をぜんぶ切っちゃまわなきゃ、やすめなんだ。ちくしょう、どんなに雪がつもつたって、自分のうちの前だけはかならず通れるようにしとくのが、雪のなかに住んでる人間の責任じゃないか。自分のうちの木なら、自分でちゃんとしまつするんだ。それができないようなら、切られたつてしょうがないじゃないか。また、枝の一本くらい切られたからって、それで枯れちゃうような木なら、いつそ枯れちまったほうがいいんだ。どけよ、あんたがめそめそ心配しないでつて、この木はちゃんとひとりで生きてくから。そうさ、いままでだつてそうやってきたんじゃないか。」

ユウコはすっかりおどろいて、目をみはりながらこの演説をきいていた。自分とたいして年のちがわないように見えるこの少年の雄弁ゆうべんにもおどろいたし、いままで、自分を子どもあつかいしていながら、きゆうに、ふつうの友だちと議論するみたいに興奮してしゃべるのにもおどろいた。さらにいちばんおどろいたことは、きいているうちに、自分よりもこの少年のほうが、ずっとつよくこの木を愛しているのではなからうか、という氣のしてきたことだった。

(わたしのほうがわるかったな。)

ユウコはそう思わずにはいられなかった。けれども、それをまっすぐにみとめるのはやはりくやしだったので、タケシがのこぎりを枝にあてても、いじになって、枝をかかえた

手をはなさなかった。

(5) (いうだけいったんだ、手を切ったって知らないぞ。)

タケシはそんな気持ちで、かまわずギリッと切りこんだ。すぐどくと思った手が、どかない。とつさに手をはらいのけようとしたとたん、タケシは左手にやけどのような痛みをかんじた。はつとのこぎりをとめると、雪まみれの手の甲こうに小さな血の玉がいくつももりあがった。

(6) ユウコは声もたえず、雪をふみちらして家のなかにかげこんだ。おかあさんがなにかいっていたが、耳にもとめずに、血どめ薬とほうたいをもつてかけもじると、タケシの手をつかんだ。タケシはちよつと手をひっこめて、「いい」とつぶやいたが、ユウコはかまわずさつさと血をふきとり、ほうたいをまいてしまった。

ほうたいがすむと、タケシはちよつと頭をさげてから、またのこぎりで枝をひきはじめた。ユウコは、すこしはなれたところから、痛そうな顔をしてじっと見ていたが、やがて頭もセーターもまっ白になるのにいまさら氣がついて、そうつと家へもどった。しんとした雪だけの世界に、ときれときれのこぎりの音が、しばらくつづいていた。

四

ひさしぶりの星月夜である。

白いひっそりとした夜のなかを、遠い町の空だけが、ぼうつとオレンジ色にかすんでいる。タケシは、電線をつんだそりをひいて、山道を一步一步歩いていた。ふかい雪のかべのあいだから見あげると、まるで谷間からのぞいたように星の色がさえて、高い木のこずえから、雪がばさつと落ちる。

(7) (そうだ、あのモミジの木、どうしたろう。氣のつよい女の子だったな。)

タケシは、赤いセーターに目の大きい少女のことを思いだして、ちよつとほえみ、手をひく手にぐいと力をいれた。

おなじころ、ユウコは、こたつの上いっぱいに本とノートをひろげて、算数の宿題をや

つていた。風もないのに、螢光燈^{けいこうとう}がぼつぼつとまたたいて、いまにも消えそうになる。じいつと見あげていると、どうやら消えずにおさまった。ユウコは、えんぴつをもった指に息をはきかけながら考えた。

(あのととき、のこぎりで切った傷、なおったかしら?)

薬はつけたけれど、ひとこともあやまらなかったのが気になる。ノートに数字をいたずら書きしながら、ユウコはまた、あの少年のいったことをひとつひとつ思いかえていた。

その夜おそく、「女王さまのモミジ」はうしろの森からなだれおちた雪のために、また一本の大枝をうしなった。——けれども、しばらくたつと、ふたたびしゃんと背をのばして、なにこともなかったように星空をささえた。春のくるのがたとえ何百年さきであろうと、この木はいつまでもこうして待ちつづけるのにちがいがなかった。

問一——線(1)「近所となりがきゆうに遠くなり」とはどのような様子を表していますか。

次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 雪がたくさん降り積もって、となりの家には簡単には行けなくなる。
- イ 雪がたくさん降り積もって家から出なくなり、となりと交流がなくなること。
- ウ 雪がたくさん降り積もって、雪にさえぎられてとなりの家が見えなくなる。
- エ 雪がたくさん降り積もって、雪に音が吸収されて周りの物音が聞こえにくくなること。

問二——線(2)『女王さまのモミジ』が……「まっていた」とありますが、「まっていた」

る」のは、現実世界での「女王さまのモミジ」のどのようなことを夢の中で暗示していると考えられますか。答えなさい。

問三——線(3)「ユウコはいつのまにか……なっているのだった」とありますが、これは

ユウコがどのようなことを暗示していると考えられますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 夢の中で巨人の国に迷い込んでそこに入り込んでしまっていること。
イ 「女王さまのモミジ」と同じ気持ちを持つ存在になっていること。
ウ いつの間にか身長が伸びて大人の仲間入りをしていること。

エ 「女王さまのモミジ」のように尊敬されることを望んでいること。

問四

——線①「ぶつきらぼう」・②「じだんだふみ」の文中のことばの意味として最も適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ぶつきらぼう

- ア 乱暴な
- イ そつけない
- ウ いい加減な
- エ 意地悪に

② じだんだふみ

- ア 悔しかったり怒ったりして地面を激しく踏み
- イ どうしたら良いか分からず足をバタバタさせて
- ウ 少しでも前に進みたくて足を前に踏み出して
- エ イライラして破れかぶれに足を蹴りだして

問五

——線(4)「タケシは、ここであくはつした」とありますが、この「ここ」は、直前のユウコのせりふの中にあるはずですが、それはユウコのせりふのどの部分ですか。本文から適切な一文を抜き出し、はじめの五字を答えなさい。

問六

——線(5)「タケシはそんな気持ちで……いくつももりあがった」とありますが、ここはタケシと木との関係を象徴的に表現している部分と読み取れます。次の中からその説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア タケシは木が切られる代わりに自分の手を差し出して、木の身代わりの役目を果たしている。

イ タケシが木を切ろうとして手にけがをしたのは、木がユウコの気持ちを代弁している。

ウ タケシのけがは木が切られる痛みと重なり、タケシと木は同じ世界にいる存在になっている。

エ タケシは切られることを嫌がる木からけがという罰を与えられ、両者は反目している。

問七

——線⑥「ユウコは声もたてず……まいてしまった」とありますが、ここはそれまでと違ったユウコとタケシの関係を象徴的に表現している部分と読み取れます。次の中からその説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア ユウコに好意を持っていたタケシのことをユウコも好きになった。

イ ユウコはタケシの世話を焼いてタケシの母親のような存在になった。

ウ ユウコは木とタケシが存在している関係の中に入ることができた。

エ ユウコは自ら積極的にタケシと理解し合う関係になろうとした。

問八

——線⑦「タケシは……ちよつとほほえみ」とありますが、タケシはなぜほほえんだのですか。その時のタケシの気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア やはり小学生だけあって子供っぽかったなあと軽くあしらう気持ち。

イ 気の強さでは自分も負けなかったなあとユウコと張り合うことを喜ぶ気持ち。

ウ 激しく反対してきたユウコに言うべきことが言えた自分に満足する気持ち。

エ 素直に自分の木への思いをぶつけてきたユウコを愛らしく思う気持ち。

問九

——線⑧「しばらくたつと……待ちつづけるのにちがいがなかった」とありますが、この部分は、木とタケシの両方の様子を同時に描写していると読み取れます。木とタケシの様子を関係づけながら説明しなさい。

問十

——線「ふるんだから……ふるんだから」という冒頭のことばは、この物語の語るどのようなことを象徴していると考えられますか。次の中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 雪国では一年中絶えることなく、そして永遠に大量に雪が降り続けていると
こづいぶ。

イ 雪国の雪の降る量は、雪のあまり降らない地方の住人には想像もつかないくらい多いこと。

ウ 雪国に住む人にとって、どんどんと降り積もる雪の存在はとても嫌なものだということ。

エ 雪国に有無を言わず降り続く雪は、降るだけ降ったら最後には降りつくしてやむということ。

オ 雪国に住む人にとって、降る雪にどのように向き合うかはとても重い課題だということ。

問十一

タケシとのやりとりを通して、ユウコの木に対する思いにはどのような変化がありましたか。次の1～3を順番に答えなさい。

1 タケシの「演説」を聞く直前までは、ユウコの思いはどうでしたか。

2 ユウコの思いが変化したのは、タケシの木に対するどのような思いを感じ取ったからでしたか。

3 タケシと別れたあとのユウコの思いはどうなりましたか。

次の文章は、荒井裕樹『まともでない言葉を生きる』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により本文には一部省略や改変があります。

震災直後、テレビのコメンテーターも、公共のCMも、いろいろと手探りで「励まし言葉」を模索していた気がする。

きつと、あの時、多くの人が「被災者の力になりたい」「励ましたい」と願ったことだろう。でも、「がんばれ」なんてありきたりな言葉は、被災者に対して失礼な気がする。励ましたいけど、傷つけたくない。そんな葛藤からだろうか、みんな慎重に、あるいは怖々と、言葉を選んでいたように思う。

あれからずつと、モヤモヤと考えて続けてわかったのは、どうやらぼくらが使う日本語には「純粹に人を励ます言葉」というものが存在しないらしい、ということだった。

〈 中略 〉

「人を励ます言葉」というと、どんなフレーズを思いつくだろうか。
ワークシoppで出てくる不動のトップ3は「がんばれ」「負けるな」「大丈夫」。他にもいろいろ出るけど、この三つの地位が揺らぐことはない。

でも、よくよく考えると、「がんばれ」と「負けるな」は、人を叱りつける時にも使う。「叱咤激励」という四字熟語があるように、日本語では「叱咤」と「激励」はコインの表裏の関係にある。

一方、「大丈夫」というのも、最近では「no thank you」の意味で使われることが多い。「コーヒーもう一杯飲みますか?」「あ、大丈夫です」といった感じだ。

ぼくらが「励まし表現」の代表格だと思っている言葉は、時と場合によつては、「人を叱る言葉」や「人と距離をとる言葉」に姿を変える。どうやら日本語には、「どんな文脈にあ

てはじめて、『人を励ます』という意味だけを持つ言葉」というのは存在しないらしい。

〈 中略 〉

いまから振り返ってみれば、東日本大震災というのは、普段ぼくらが使っている「励まし言葉」ではまったく対応できない事態だったのだろう。

ひたすら堪え忍ぶ被災者に「がんばれ」は相応しくない（もうゲンカイまでがんばっていた）。「負けるな」というのも変だ（被災に「勝ち負け」は関係ない）。「大丈夫だよ」もおかしい（実際「大丈夫」ではなかった人たちがたくさんいた）。

そうこうしているうちに、どこからともなく「ひとりじゃない」というフレーズが出回るようになった。被災者を孤立させず、連帯しようという思いを込めた新しい「励まし言葉」だったと思う。

でも、これも使い方次第では「苦しいのはあなただけじゃない（だからガマンしましなう）」という意味になりえてしまう。

多くの人に向けられた言葉は、どうしても編み目が粗くなる。一口に「被災者」といっても、実際にそこにいるのはさまざまな事情を抱えた一人ひとりの人間だ。だから、ひとつの言葉が全員の心にびつたりと当てはまるなんてことがあるはずない。「その言葉は今の心情にそぐわない」という人がいれば、そのたびに言葉を探すことが必要だ。

もちろん、震災は言葉だけでなんとかなる問題じゃない。だからといって、言葉は二の次でいいわけでもない。

さっきのワークシoppで気づいてほしいのは、「どんな場面でも人を励ませる便利な言葉なんてない」ということ。そんな「ドラえもんの秘密道具」みたいな言葉は存在しない。

でも、不思議なもので、ぼくたちは普段から「誰かの言葉に励まされる経験」をしている。やっぱり「言葉が人を励ます」ことは確かにあるのだ。

だから、「言葉は無力だ」と絶望することはない。言葉信じて、「言葉探し」を続けたらいい。

とは言ってみたものの、そもそも「言葉を信じる」というのは、一体どういうことなの

か。こういうことは、実際に「言葉を信じた人たち」が遺した言葉から学ぶしかない。

(4) 昔の患者はある意味でみんな詩人だったんじゃないかな。自分じゃ気が付かないだけで。

X

からね。

この言葉を記したのは、ハンセン病回復者の山下道輔さん（一九二九―二〇一四年）。長らく国立ハンセン病療養所で生活されていた方だ。

ハンセン病療養所には、過去にこの病気を患い、治癒した後もいろいろな理由で、こゝ以外に生活の場所がない人たちが暮らしている。

「いろいろな理由」というのは、例えば病気の後遺症があつて介助や医療的ケアを必要としたり、長期間の入所を強いられため社会で生活する術がなかったり、地域社会から差別されて「帰ってくるな」と言われたりと、本当に「いろいろ」だ。

日本では長らく患者を隔離する政策がとられ、多くの患者たちが療養所にシエウウウされた。「遺伝する」とか「伝染する」とか、**ゴカイ**や偏見を持たれたこともあつて、患者たちはとても差別された。有効な治療法が確立・普及した後も、差別は続いた。

壮絶な差別から身を守るために、身内に差別が及ばないように、療養所では偽名を使う患者も多かった。場合によつては、身内から本名を捨てさせられることもあつた。

山下さんは一九四一年に一二歳で療養所に入所した。それから二〇一四年に亡くなるまで、実に七〇年以上も療養所で暮らし続けた。ハンセン病関連の資料を集めた「ハンセン病図書館」の主任をツトめていて、「歴史を伝える」ことに人生をかけた人だった。

山下さんが入所した頃の療養所は、ひどいところだった。社会からの差別もあつたし、横暴な医療者や職員もいた。現在なら「人権侵害」とされることもたくさんあつた。「療養所」のはずなのに食事や医療も乏しくて、患者たちも農作業をしたり、土木作業に携わったり、重症者介助を手伝つたりして働かないと、施設自体が立ちゆかなかった。

そんな中でも、患者同士の友情があり、愛情があり、笑いと涙の人情劇があり、職員の目を盗んで何かを企てようとする攻防戦があつた。もちろん、**フクザツ**でややこしい人

間関係もあつたし、ケンカやいさかいもあつた。

陳腐な言い方だけれど、そこでは、ぼくたちと変わらない「等身大の人間たち」が生活していた。

一九四九年の冬。山下さんの友人が亡くなった。療養所の外の畑に芋を盗みに行つて捕まり、袋叩きにされたのだ。盗みはよくない。でも、敗戦後の療養所は食糧事情が悪くて、みんなお腹を空かせていた。彼は自分が面倒をみている重症患者に食べさせるために、あえて芋を盗みに行ったのだ。

傷ついた彼が療養所に戻つてきて、どうなったか。許可なく外に出たことをとがめられ、監房に入れられた（当時のハンセン病療養所には監禁施設があつた。それが祟つたのだろ。彼はその時の傷がもとで死んでしまった。絵を描くのが好きな人だった。

昔の患者は私物をほとんど持てなかつた。**ミモト**を隠している人も多い。遺族もわからなければ遺品もない。ということは、「その人が生きていたという事実」が遺らないということだ。そんなの悲しすぎる。だから、山下さんは友人のために追悼詩を詠んだ。

強い北風の吹く明方／鏢のない戦闘帽を斜に被つた友は、それまで糞尿をふんばりださんとしたのに……／泡を噴き、消え絶えた小さな懐炉を下腹の上で握りしめたまま、かつての日、己が描いた「冬の窓」の懸かつたがくに貌をそむけて逝つた……

「果てに……亡友瀬羅へ」「山櫻」一九五〇年一月号

詩を詠んだって、死んだ友人は帰つてこない。

患者への差別が消えてなくなることもない。

それでも山下さんは、誠心誠意、この詩を詠んだ。

せめて言葉で遺しておけば、いつか、誰かが、彼のことを思い、彼のために祈つてくれ

るかもしれない。

「言葉を信じる」というのは、きつと、こういうことなんだろう。

自分の力ではどうにもならない事態に直面して、それでも誰かのために何かをしたくて、でもどうしたらいいかわからなくて、それでも何かしたくて……という思いが極まったとき、ふと生まれてくる言葉が「詩」になる。

山下さんが言う「詩人」というのは、きつと、そういう言葉の紡ぎ手のことだ。

昔のハンセン病療養所には、そんな「詩人」たちがたくさんいたのだろう。過酷な差別を生き抜くために、お互いに支え合うための言葉が交わされていたんだと思う。

なにか酷い出来事が起きたとき、「言葉は無力だ」と言われることがある。何を言っても「きれいごと」と批判される。

あの震災の後にも、「文学なんか役に立たない」と言われた。「つべこべ言わず、ボランティアするなり、支援物資送るなりして、身体を動かすべき」とも言われた。

ぼく自身、「言葉に関わる仕事」に引け目を感じた。

でも、山下さんの言葉は「どんなに困難な状況でも、言葉で人を励ますことを諦めなかった人たちが」がいた事実を伝えている。大切な人を支えるためには、やっぱり言葉が必要になるのだ、ということを教えてくれている。

実を言うと、ぼくは大学院生時代の二年間、山下さんの図書館でボランティアをしていた。山下さんの「歴史を伝える」ことへの執念に触れて、学者になることを志した。

だから、山下さんの言葉は、ぼくにとっては家宝みたいなものだ。

ちなみに、戦後の障害者運動は、ハンセン病患者たちが差別に立ち向かったことが原点（のひとつ）なんて言われている。

仲間のために言葉を諦めなかった人たちだからこそ、世間の差別に対しても、黙らずにいられたんじゃないか、と思う。

問一 線①～⑥のかたかなをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 線①「手探りで『励まし言葉』を模索」とありますが、「手探り」の状態になつてしまうのは「励まし言葉」がどのようなものであるからですか。答えなさい。

問三 線②「ひとりじゃない」とはこの文章において、どのような言葉ですか。説明として適切なものには○を、そうでないものには×を、それぞれ答えなさい。

ア 一般的な「励まし言葉」とは全く性質が異なり、震災で苦しむ人々を誰も傷つけず、あらゆる状況にあてはまる励まし言葉。

イ 人々が、震災で苦しむ人々のことを思いやり、ああでもない、こうでもないと考え、ようやくたどり着いた「純粹に人を励ます言葉」。

ウ 「がんばれ」や「負けるな」といった言葉では対応できない震災で苦しむ人々を支える可能性のある励まし言葉。

エ 新たな励まし言葉ではあるものの、場面によつては震災で苦しむ人々を傷つけてしまう可能性をもった言葉。

問四 線③「言葉を信じて、『言葉探し』を続け」る、とはどのようなことですか。説明しなさい。

問五 線④「昔の患者はある意味でみんな詩人だった」について、後の1～4にそれぞれ答えなさい。

1 本文の X からね。には、——線④「昔の患者はある意味でみんな詩人だった」と言える理由が入ります。次の空らんにあてはまる形で答えなさい。

①（どのような）ハンセン病患者は、言葉で ②（何を）した からね。

2 「ハンセン病回復者の山下道輔さん」はなぜ「友人のために追悼詩を詠んだ」のですか。「遺品」ということばを用いて答えなさい。

3 山下さんが詠んだ「果てに……亡友瀬羅へ」について説明したものととして適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「強い北風の吹く明方」は深刻な状況でも懸命けんめいに生きようとした「亡友」の姿が読み取れる。

イ 「鏝えんのない戦闘帽を斜に被った」様子は生前の「亡友」の普段の姿を表すことで、その後の死の描写と対照させて、より死を際立たせている。

ウ 「消え絶えた小さな懐炉ともしび」は寒さをしのぐ、わずかな温かみのあるものを表しつつも、「亡友」の命の灯火が静かに消えていくさまを表す。

エ 「亡友」が、絵の好きな山下さんの描いた「冬の窓」から顔をそむけたのは、暗に山下さんとの別れを表現している。

オ 「果てに……亡友瀬羅へ」という題が「亡友」宛てになっているのは、この詩が書き手のためや、周囲のためではなく、友人のために紡がれた言葉であることを表している。

4 「東日本大震災」において「ひとりじゃない」という言葉は「ある意味」で「詩」であった、と言つことができます。それはなぜですか。「思い」ということばを用いて答えなさい。



問四	ア	問三				
	イ					
	ウ					
	エ					
問二	④	①	問一	一		
	めて				②	
	⑤					③
	⑥					

4		3	2	1		問五
				②	①	

問九	問五	問三	問四	①	②	問二	問一	一					
									問六	問七	問八		
												問十	
													問十一

3	2	1	問十一	問十

試験会場の机の上にある
シールを1枚ここに貼ります

受 験 番 号				

氏名

